



ケアの社会 : ケアの倫理を巡る研究

著者	二川 早苗
発行年	2018
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2018
報告番号	12102甲第8798号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00153914

氏 名	二川 早苗
学 位 の 種 類	博士（ 文学 ）
学 位 記 番 号	博 甲 第 8 7 9 8 号
学位授与年月日	平成 3 0 年 9 月 2 5 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	ケアの社会——ケアの倫理を巡る研究——

主 査	筑波大学 教 授	博士（文学）	桑原 直巳
副 査	筑波大学 教 授	文学博士	伊藤 益
副 査	筑波大学 教 授	文学博士	佐藤 貢悦
副 査	国際基督教大学特任教授	博士（文学）	川本 隆史

論 文 の 要 旨

本論文は、ケアの倫理に定位しながらその社会化可能性について考察し、「ケアしケアされる社会」の構想を意図したものである。ここでの「社会化」とは、家事労働に象徴されるケア労働の負担のみならず、社会が如何にしてあらゆる人々を包摂しうるかといった公共性にかかわる問題を含み、子育て、高齢者介護のような福祉政策や学校や家庭での教育、ジェンダー問題、格差や貧困にかかわる経済政策にまでその射程は及ぶ。ケアの倫理は、あらかじめ与えられている社会規範にたいして、人間の行為の背景で矛盾をはらみつつせめぎ合っている人間の生き方を肯定することからはじめるようわれわれに促し、その規範や行為の正当化判断の手前から思考することに挑戦することを求めている。言い換えれば、自立の前に依存があり、われわれの存在自体がヴァルネラブルなものであることを認めるとともに、そのヴァルネラビリティを内包した個人が相互に承認され、ささえ合う社会の構築を目指すものである。同時に、そのヴァルネラビリティへの配慮を促すケアの倫理は、「固定化したジェンダー・アイデンティティ」を問いなおすものでもなければならない。かかる問題意識から発する本論文は、ケアの価値は正当に評価されてきたか、労働としてのケアにジェンダー平等は為されているか、という問いを前提としている。

論文の構成は以下の通りである。

第 1 章から第 3 章では、それぞれの論者の視点からケアの倫理の概念を検討している。第 1 章では、ケアすることの一般的な記述と、ケアすることがどのように人間の生きる意味を与えるかを主題的に扱ったメイヤロフのケア論を考察している。メイヤロフのケア論は、ケアする人にのみ視点がおかれていると批判されることがあるものの、人間の生きる意味を「他者をケアすること」において見出し、自己の成長に資する関係として、哲学的・人間学的に論じていることが示される。ただし、メイヤロフにあってはジェンダーとケアの関係については問われないままであることが指摘される。

第 2 章では、この問題に道德発達理論の立場から取り組んだギリガンのケア論を検討している。師コールバ

ーグとの実証的な研究をするなかで、男女の道德観のちがいを見出したギリガンは、コールバーグの道德発達理論は、人間一般の発達を描いたとしながらも男性を基準にしており、女性の発達を捉えそこなっているばかりか、男性より女性を劣ったものとしてきたとして、異議申し立てをした。伝統的な倫理観として、公平を重んじ、原則や規則の普遍性を求めるコールバーグの正義の倫理と、人間関係のあり方を重視し、特定の誰かを気遣い、世話をする存在としての視点を重視するケアの倫理との論争の今日に至るまでの展開を解明している。

第3章では、ケアの倫理を理論化したノディングズのケア論を分析している。本章において、終章での社会政策の問題にまでおよぶ主要な検討対象となるノディングズの思想の骨格像を提示している。ギリガンによって提唱されたケアの倫理は、近代合理主義が削ぎ落としてきた、人を思いやる感情や、個別具体的な状況に身を置き、責任を引き受けようとする態度を捉え返そうとするものであった。ノディングズはこれを「ケアの思想」へと発展させた。ノディングズのケア論は、ケアの営みが人間にとって第一の目的であり、それは単に行為を指すだけではなく、ケアの関係性における他者への受容的応答的なあり方であることを示している。

第4章では、「倫理の最小限」の概念という観点からケアの倫理と正義の倫理の関係を検討している。最良の理由によって行われようとする努力こそが優れて倫理的な行為だとすれば、そこで前提されているはずの「倫理の最小限」の概念についての扱いを、抽象化、普遍化可能性、公平の原則などの観点から、ケアの倫理と正義の倫理とにおける相違を浮き彫りにすることでケアの倫理の特異性を示している。

第5章では、ケアの倫理におけるニーズ論が検討される。ネオリベリズムにおける市場経済は、所有への欲求が存在することで機能している。旺盛な消費が生産を促し、刺激された欲望がまた消費する。グローバル化された社会は、富裕層と貧困層の格差を拡大させた。日本においても格差が広がり、基本的ニーズすら満たされない子どもがいる一方で、最富裕層の消費は膨れ上がっており、受け入れがたい不平等の側面を露にしている。この章では、際限なく膨らんだ人々の欲求と「ニーズ」と峻別し、そのニーズを権利へと拡張し、それをケアへと反映させるプロセスの正当性を検討している。

第6章では、ガルトウングの構造的暴力の理論を援用することで、ケアと暴力との関係を解明している。ノディングズのケアの倫理は、「ケアリングの関係性」の維持を重視し、「助け合い reciprocity」の社会の構築を目指すものである。そのような社会とは、誰もが自己実現でき、よりよい生活を送ることのできる個人を基軸とした連帯的な社会である。しかし、われわれの日常は、理想とは異なり、さまざまな暴力に晒されている。誰の目にも明らかな暴力が存在する一方で、暴力の本質は隠されたところにある。著者は、ガルトウングの「構造的暴力」の概念を用いて、貧困とジェンダー不平等の問題性を解明している。

第7章では、ポスト・ロールズの正義論と位置づけられるヌスバウムのケイパビリティ・アプローチについて論じている。ロールズをはじめとする社会契約理論は、社会を相互有利性の関係とし、社会的協働に寄与できない人々は、社会の成員とはみなされないとする。そこにヌスバウムはロールズの限界をみてとった。生の偶然性という不確かさからすれば、相互有利性の関係から排除されることは、誰にとっても例外的なことではない。著者は、そうしたヌスバウムのケイパビリティ・アプローチを、相互有利性ではなく相互依存を基盤とした社会の枠組みとして位置づけている。

第8章では、ケアの倫理を公的領域に適用することへの批判と可能性について、ケアの倫理における責任問題の形で考察している。その際、自然的ケアリングを想起することで倫理的ケアリングが可能となるとするノディングズの倫理的理想を中心に検討している。自然的ケアリングをすべての人が経験しているわけではない。虐待されて育った経験や親から捨てられた経験が記憶の奥にしまわれているという子どももいる。ケアされた記憶が乏しいなら、その記憶を辿ったとして、倫理的ケアリングは不可能であろう。むしろ身体化された記憶によって虐待の連鎖を生む可能性もあり得る。だとすれば、この結論は、確かに理想的ではあるが、ケアする人のさまざまな条件を捨象し、個人の倫理観だけに責任を負わせることになりかねない。結論的に著者は、倫

理的な自己と現実を架橋するに、抗いがたい運の不平等を埋めるための社会政策の必要性を主張している。

終章では、今あるわれわれの生き方は、ネオリベラリズムと資本主義経済が手を結んだ社会構造に無理やり合わせている現実であることを指摘し、競争を勝ち抜くことが是とされるような社会のあり方を問い直している。さらに、近代社会が育児や介護といったケアを女性のアンペイドワークとしてきたことが明かされ、これらのことが、女性の貧困を生み、個人の責任とされてきたことを指摘している。それゆえ、社会は脆弱性のニーズを軸に熟慮しなければならない、他者への共感だけを頼りにすることなく、社会の構造として取り組む必要があることを著者は主張している。著者によれば、子ども、障害者、女性、病人、高齢者、災害で困難な状況にある人、あるいは、非正規雇用の労働者や移民といった人々が、劣った人間とみなされたり、無視されることなく、能力ある個人となることのできる社会こそが、ケアの社会である。著者は、誰もが脆弱な個人であることを前提としたケアの倫理は、人間の相互関係を重視するのみならず、政策の基盤として現実の制度を問題とすることで、社会を構造的に改革しようとするものであることを主張している。

審 査 の 要 旨

1 批評

この論文は、ノディングズを中心に「ケアの倫理」が社会にとって有する意義、「ケアの倫理の社会化」の可能性についての検討を試みたものである。

まず、メイヤロフ、ギリガン、ノディングズへといたる「ケアの倫理」の展開を正確に跡づけることにより、特に、本論文の主要な研究対象であるノディングズを中心とする形で「ケアの倫理」の本質を的確に浮き彫りにしている（1～3章）。次いで、ノディングズを中心とする「ケアの倫理」について、その「社会化」に関連する問題場面に即しての検討が試みられている。すなわち「ケアの倫理」と「正義の倫理」との関係（第4章）、ニーズ論（第5章）、ジェンダー不平等の問題（第6章）、ヌスバウムの「ケアパビリティ・アプローチ」との連関（第7章）などである。各場面における問題状況、ノディングズおよび関連する論者たちとの関係についての分析は正確かつ妥当なものと判断される。その限りで、本論文はノディングズを中心とする「ケアの倫理」の社会化可能性についての包括的な検討として評価することができる。

ただし、著者には「客観的叙述」ということに固執するあまり、「一人称的主張」を抑え「三人称的記述」に自己限定する点に過度の禁欲性が見られる。ノディングズのケア論および社会的現実に対する「一人称」による批判的な主張は、第8章および終章において一応登場している。しかしながら、筆者自身が特に日本社会の文脈の中で「ケアの倫理」をどのように活かしてゆくのか、という点については萌芽的な見通しにとどまっていると言わざるを得ない。

しかしながら、本論文がノディングズを中心とする「ケアの倫理」の社会化可能性についての包括的な検討としての学術的価値を有することは疑いなく、審査委員会としては著者に博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を認めるものである。

2 最終試験

平成30年7月10日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。